

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

(35)

おそろい、どこかにゆとりがあった時代だったかもしれない。私は「それじゃ行ってくるよ」と会社に行くと言いつつ、実は会社の同僚とともに五葉山を目指していたのだ。初めての登山である。

五葉山の名前は聞いていたが、どんな山か、登山にはどんな準備が必要かも分からない。朝用意していただいた弁当を持って、大船渡市日頃市町関谷から赤坂峠を通り頂上に向かう。途中、曇石でひと休み。

頂上までは遠いのか近いのか、道は急なのか緩やかなのかも分からない。い。全てが初体験である。確か頂上付近だったと思うが、ハイマツが登山道に覆い被さるように枝を伸ばしていた。

「まだ着かないのか。あとどのくらい歩くのだろうか」と、体力が心配になってきた。歩き始めてから六時間が経とうとしていた。背丈ほどのやぶを抜けると急に視界が広がってきた。

「頂上まではもうすぐだ」と、同僚たちが励ましてくれる。やっとたどり着いた頂からの眺めは格別だ。眼前に太平洋が広がっている。真後ろには遙か遠く山並みが連なる。五十二年前、十七歳

の時の登山風景が今なお記憶に鮮やかだ。上京を機に五葉山登山とは縁遠くなってしまったが、茨城県の東金砂山、筑波山、加波山、さらには富士山にも登った。

東京での仕事を辞めて参加する地域挙げての行事であった。登りはじめは皆元気だ。会話も弾む。冗談もよく飛び交う。子どもたちも競うように先を急ぐ。また歩き始めて一時間経たないのだが、曇石近くになると急に口数

が少なくなっていく。ここから緩やかな登山道をたどることになるのだが、何とか落伍者もななく、全員シャクナゲ山荘に正午前にたどり着くことができた。それぞれの顔には達成感、充実感がにじみ出ていた。

オレンジ色の初日の出

住田町世田米

松田 勲男

世田米から負し切りバスで赤坂峠に向かう。狭く折れ曲がった道が連続する。小学生から七十五歳位までの年齢層で、まさしく地域の老若男女が

「ここ」でいただいてしまった初登山のことが思い浮かんだ。二十年前、「母の弁当」も一緒に登山していたのだ。そのことを今も母は知らない。

隣に座り「いい眺めだ。いいところだ。五葉山は」と言う母に、心を裸にし素直にさせてくれる登山だが、いまさら二十年前の「うそ」を言え

前到着であった。海に向こうにオレンジ色に輝く光。水平線に平行に重なる雲を明るく浮き立たせる。やがて光の筋は勢いを増し、あたりを照らす。

時を忘れさせてしまう力がそこにはある。初めてみる五葉山の初日の出。遙か彼方に白く光る山が見えた。岩手山であった。

三六〇度の展望を楽しませてくれる五葉山。足

を運ばば運ぶほど親しみや愛着が深まっていく。登山仲間との出会いが、いつまでも五葉山登山へと掻き立てる。山の仲間たちに感謝したい。

【執筆者プロフィール】住田町世田米在住、七十歳。五葉山自然倶楽部で登山を主体に活動する「黒岩会」に所属。いつも言うことがある。「山を汚さない」「自然を大切に」「ゴミは拾う」。必ず三角袋をもって山に入る。「黒岩会」の掟が生きている。

頂上までは遠いのか近いのか、道は急なのか緩やかなのかも分からない。い。全てが初体験である。確か頂上付近だったと思うが、ハイマツが登山道に覆い被さるように枝を伸ばしていた。

【執筆者プロフィール】住田町世田米在住、七十歳。五葉山自然倶楽部で登山を主体に活動する「黒岩会」に所属。いつも言うことがある。「山を汚さない」「自然を大切に」「ゴミは拾う」。必ず三角袋をもって山に入る。「黒岩会」の掟が生きている。

リレー
エッセイ

頂上までは遠いのか近いのか、道は急なのか緩やかなのかも分からない。い。全てが初体験である。確か頂上付近だったと思うが、ハイマツが登山道に覆い被さるように枝を伸ばしていた。

頂上までは遠いのか近いのか、道は急なのか緩やかなのかも分からない。い。全てが初体験である。確か頂上付近だったと思うが、ハイマツが登山道に覆い被さるように枝を伸ばしていた。



五葉山山頂から見る初日の出